

「ちょっとだけやってみない？」が、ひらく世界

#フレンズ☆SAKAE／

#Sakae Wakamono Creation 2024



子ども・若者の居場所づくりが議論されるとき、必ず語られるロジャー・ハートの「参画のはしご」。そこには地域社会への参画の度合いを高めていくスモールステップが示されており、地域の大人たちはそれを見て若者のまちへの積極的な関わりをすぐに期待してしまうものです。

ただ、若者たちにとって生活の場である居場所は、家庭や学校を離れてそこに安心して居られるということ、そのものが最初のステップ。主体的な参画のステージに歩み出す、最初の一步を探してある居場所を訪ねました。



フレンズ☆SAKAEの施設。開放感のある表側でワークショップなどが行われ、実家のような裏側ではくつろぐ姿も。どちらもフル活用

フレンズ☆SAKAE

横浜市栄区本郷台に位置する青少年の地域活動拠点、フレンズ☆SAKAE。徒然草の作者、兼好法師が和歌を詠んだことでも知られるいたち川にほど近い、のどかな環境に利用者の声が絶えない居場所があります。

横浜市の青少年の地域活動拠点は、平成19年の要綱制定以来、青少年の交流や社会参画の場として機能を拡大しており、現在全18区のうち7区に設置されています。そのうちフレンズ☆SAKAEは、子育て中の親子、青少年、障がい児・者といった幅広い対象を支援する4つの機能を有する複合施設、さかえ次世代交流ステーション内にあることが特徴です。

各施設を運営する社会福祉法人、「地域サポート虹」と「訪問の家」の2つの団体が、各機能の提供にとどまらず、年代や障害の有無にとらわれない利用者相互の交流や支援者との連携を図りながら運営をしています。

Sakae Wakamono Creation 2024

フレンズ☆SAKAEのもう一つ特徴的な取組みが、「ティーンズクリエイション」、いわば地域ぐるみの若者の芸術祭。近隣のアート活動団体や他の青少年支援団体等とともに2012年に活動を開始し、2018年からは「ティーンズクリエイション組織委員会」を構成して企画しているもので、10周年にあたる今年度は「Sakae Wakamono Creation 2024」として実施しました。

中身は近隣地域の中高生世代の作品展示部門「ティーンズクリエイション展2024」と、高校生～20代前半の若者を公募して行う創作舞台の2本立て。県立地球市民かながわプラザ（あーすぷらざ）を舞台に、12月に作品展示部門とプレ公演を含むライブ、1月に創作舞台部門の本公演を実施しました。

作品展示部門

ティーンズクリエイション展 2024

創作舞台とリンクしたテーマ、「内なる自分を探す旅 ―見えている自分と本当の自分―」をテーマに、中高生世代を中心とする若者の文化作品展示、ライブパフォーマンス（ダンスパフォーマンス、創作舞台部門プレ公演、トークセッション）を行いました。

姉妹都市の長野県栄村の小中学校や、プロアーティストの出演もあり、地域の様々な繋がりが感じられる会になりました。



プレ公演と同時に行われた展示部門の様子。例年区内の小中学生の作品を中心に、多くの参加がある

※ 作品展示総数 318点
来場者総数 延べ 574名

創作舞台部門

「DeLeTe#君と私が■された日」

栄区を中心に、中学生以上の若者を対象として参加者を募り、応募者14名（キャスト13名、制作サポーター1名）で7か月の期間をかけて稽古、制作を行いました。1月18日（土）に迎えた本番では、3回の公演に計371名もの観客が来場しました。

主催者より
「開催にあたっての取組、および成果」

創作舞台では芝居を軸に、身体表現、群読、合唱を取り入れ、様々な表現方法により舞台を創作した。その表現を形にするために、即興表現や身体表現、歌、発声などのワークショップを行い、芝居やステージ経験のない参加者でも不安なく活動できるようにした。演劇活動を通じて、表現する楽しさ、仲間と一緒に活動する喜び、繰り返し練習する厳しさを感じつつ、芝居だけでなく多様な表現方法で公演を体験することができ、参加者が貴重な経験と感動を得ることができたと感じている。

昨年の演劇活動から引き続き参加者同士の関係継続がなされていて、今回の活動に参加できなくても、公演当日の手伝いなど、たくさんの仲間を支えられて舞台が完成されたと感じている。

今後は、若者が企画提案し、それを大人と共に具現化できるような活動としていきたい。

（「まとめとアンケート報告」より抜粋）



ストーリー

主人公はどこにでもいる女子高生。自分に自信のない彼女は、いくつもの仮面（ベルソナ）を被ることで理想の自分を演じていた。しかし、理想と現実のギャップに苦しみ、たまった鬱憤はある日言葉の刃となり、味方であるはずの人々にまで向けられていく…



ティザー動画



参加者（キャスト）の声

今回は群像劇で、それぞれに見せ場がありました。身体表現ではコンテンポラリーに丁寧に取り組んだので、個々の表現で差を創ることもできたと思います。

私は4回目の参加です。演劇が好きで参加したところ、歌も群読も付いてきたという感じで、新しい体験があって楽しかったです。ストーリーを予想するのが楽しみで、キャストへのあて書きではないと思うんですが、書き上がった台本を読みながらメンバーたちと「この登場人物が似ているんじゃない?」、なんて話をするのも楽しかったです。

当日、インフルエンザで参加できなかった子が、始めたときは遠慮がちだったのに来年またやりたいと言っていたのが嬉しかったです。常に初めての人がいるのも、新しい人と関わるいい機会になっています。

私は個性をどう捉えるか、権利をどう尊重するか…について関心があるので、いつかそういうテーマにも取り組んでみたいですね。

観客の声 (関係者より)

劇評 創作舞台「DeLeTe #君と私が■された日」

美しい映像、印象的な語りから始まり、歌唱、身体表現、群読が丁寧に配置された展開。舞台装置や小道具、音楽の演出が行き届き、衣装やメイクもミニマルに世界観を伝える。主人公達の心の動きを追体験させる演技はそれぞれ「主演」に相応しいが、それとともに周囲を固める演者が世界に奥行きを創り出す。彼らの存在が舞台に新たな視点を与え、茫洋としたベルソナを立体的に形づくっていく。

独立したよくあるエピソードがやがてひとつの事件として顕在化するとき、それまでのテキストが象徴的な意味を帯び始める。心地よい対句的な文体、エモーショナルな表現にテンポよく魅せられる中、突如として揺り動かされる強いインパクトがそこにはある。言語化の難しいこの観劇体験は、観客の胸にプロデューサーの意図以上に深く刻まれたと言ってよい。

終盤にかけて抽象の度合いを高めていく構成ながら、いささかも目を離すことはできない。私たちがともすれば匿名化し、他人事として逃げてしまうテーマに、誠実に向き合い、闘う姿勢をみるからだ。自らのベルソナを考えさせられると同時に、逆説的に到達するのは、自分自身が人間という集合体、あるいは時代性のベルソナのひとつに過ぎないという感覚でもある。若者のナーバスさ、デリケートさを、これほどダイナミックに描く作品はそうはない。

SNS上の誹謗にあふれる時代を生きざるを得ないこの時代の若者が、DeLeTeを演じている。成長することの苦しみを、全身を通して瑞々しく伝えている。観客のどこかに、演者のどこかに、何か形で見えない価値が残るのだと思う。それは「あの時代」として、いつか私たちが呼び起こす記憶を紡ぐ。社会にとって小さな出来事でも、一人の人間にとってのかけがえのない一歩であること。それが人生にとって特別な瞬間であること。プロット上でみせた成長は、現実の彼らの人生の軌跡でもある。

劇中で敢えて明かされることのなかった「■」。君と私が祝福された日、と私は読みたい。

さかえ de つながる、参画のはしご

元利用者が語る フレンズでの日々と未来

フレンズ☆SAKAEの元利用者で、現在東京都にある児童養護施設に勤務する坂本 祭（まつり）さん。高校時代のティーンズクリエイションとの出会いは、同時に彼にとってはたくさんの人との出会いそのもの。やがて主体的な参画のステージへ駆け上っていくことになる若者の成長の軌跡は、居場所づくりのヒントにあふれていました。

フレンズ☆SAKAE／ティーンズクリエイションとの出会い

「フレンズ☆SAKAEを知ったきっかけ、出会いはなんでしたか？」

高校時代、おもちゃの病院というボランティア部に入って活動をしていました。そのおもちゃの病院は、地域の子供たちのおもちゃを直す活動で、それがこういって世界に最初に足を踏み入れたところですね。

学校全体も結構地域のイベントに積極的に参加する学校だったので、そういったボランティアをする中で自分でも何か参加できる活動がないかなと考えていた時、栄区でパン屋を営む母がチラシを持ってきてくれました。

「ティーンズクリエイション Wakamono Arts Festival（わかものなんでもぶんかさい）」。なんかこれボランティア募集してるそうだからやってみたら、と言われて、飛び込んでみたのが最初のきっかけでした。

「最初は芸術祭との関わりだったんですね。出展者、出演者になったということでしょうか？」

ちゃんと絵を描いたことはなかったので、何か出展するというよりはそれこそスポーツとしてボランティアをやりたいというような気持ちで。芸術作品の展示会場のボランティアでした。

最初は会議に参加させていただいたんですが、情けないことにめっちゃめっちゃつまらなかったんです。というのも、高校2年生の僕にできることなんて何にもなくて、自己紹介ただけで終わった記憶があります。

不安が残る中で当日を迎えて…いざ当日を迎えると、そのイベントがすごく楽しいものでした。作品を展示する作業も楽しかったですし、展示場でお客さんと話すのもすごく楽しかったですし。会議ではあまり話す機会はなかったんですが、当日になってスタッフのみんなとちゃんと話せるようになって、自分のことも知ってもらって、というのが心地よかったんですね。今年の展示は行けなかったですが、高校2年生からは毎年行ってたんじゃないかなと思います。

当時、その場に岩堀さんもいて、フレンズ☆SAKAEのことを知り、今度行ってみようかなと思って、行き始めて…という流れです。

ティーンズクリエイションの価値

「一地域にそういう場がある、ティーンズクリエイションがある、ということについて、今はどんな感想をお持ちですか？」

例えば美術部や書道部の展示が学校内で完結していたり、それぞれ作品を中々見てもらいにくいというようなことはあると思います。展示部門に関しては、いろんな部活が一緒になって、物を展示し合っている環境がいいですね。

実は演劇部門の方では僕も出演したことがあります。それまでは演劇に触れる機会も全然なかったので、こういう世界があるんだというのを知ったし、さらに演劇を通して、フレンズで全然話したことがない子とも話せるようにもなりました。

後から振り返ってみると、今の僕があるのも、そういえばティーンズクリエイションがあったから、フレンズ☆SAKAEがあったからかな、みたいな感じはあります。今、僕は児童養護施設で働いていますが、子どもたちに何かできないかって最初に思った場所はフレンズですし、あと地域活動を結構がんばりたいと思っているんですけど、それも高校2年生のときの最初のティーンズクリエイションのワークショップが影響していますし。

その年たまたまですけど、「祭」について考えるワークショップがあったんですよ。栄区でお祭りをすごく盛り上げている方がいらして、その方から日本の祭とはなんぞやっていうのを教えていただくワークショップで、とってもおもしろくて。

その方が結構すごい方で、外国でお神輿をやっちゃうみたいな、自分のお神輿を持って行って日本の祭の文化を知ってもらいたい活動もしていました。それから、自分の映画を作って映画祭をやることにしたから手伝いに来てほしいとか。その関わりから、地域で活動することがどんどん楽しくなっていくと思いますね。

当時、一緒に神社を月に一度掃除するというのを始めたんですけど、もう5年ぐらい継続しているんです。最初の方は他に2人ぐらいしかいなかったメンバーが、今はもう40とか50人くらいになっていて、さらにそこから太鼓チームができたんですよ。僕も一緒に活動していて、最近笛を始めました。太鼓と笛を合わせて神輿を担いで、を目指しています。

他の方で、国際協力についてのワークショップに参加したこともあります。日本の若い子たち、23歳ぐらいまでの子たちを海外に行かせてあげようという活動をされている方でした。その方とも仲良くなって、僕もぜひ海外に行きたいですって言ったところ、本当に行かせていただいたこともあります。

ティーンズクリエイションにはいろいろな経験、体験をいただいたと思いますね。

フレンズ☆SAKAEでの日々

一ティーンズクリエイションのワークショップはフレンズ☆SAKAEで行われることが多いそうですが、そういった拠点、場があると、機会が雪だるま式に増えていくのかもしれないですね。言葉を変えると学校に通って、おうちに帰って…というだけの生活だと出会えない人に会える空間です。

仮に、坂本さんがティーンズクリエイションに出会わなかったとしたら、どんな大人になっていたと思いますか？

おそらく子ども関係の仕事には就いてないんじゃないかと思いますね。休日もゴロゴロして特に何もしていないと思います。元々高校でボランティア部に入ったのも、ティーンズクリエイションでボランティアをしてみたのも、なんか暇だったから、というのが正直なところで…。

福祉系の職業に興味はあったので、そういった仕事はしているかもしれないですけど、子どもと関わるというもう一つの軸ができたのはフレンズ☆SAKAEでの日常が大きいですね。

プレーパークで子どもたちと遊んですごく楽しかったこと、これは印象に残っています。それから、不登校を経験している子たちや、家庭が難しい状況の子たちとの会話とか。太鼓の活動が始まって、地域の子どもたちが来るようになって、休憩時間に「まつり～、遊ぼうよ！」って言われて遊んだり。

子どもに関わる職業に就きたいと感じ始めたときに、自分にできることはなんだろう、何をしてあげられるんだろうという、自分に対する問いかけが生まれ、フレンズ☆SAKAEでの日々の中、じっくり考えることもできました。

質問に戻ると、今まで自分が気づかなかった世界や、いろんな大人、違う世代の子の視点に触れて今の自分自身になっていったんだと思いますね。

一子どもや若者の居場所は社会的に注目されていますけど、フレンズ☆SAKAEは特に世代間の交流がすごく得意ですね。

居場所について考えたとき、ただ場所があるということではなく、安心できることも一つキーワードになってきます。場として、あるいは関わり方として安心できたところはどんなところだったと思いますか？

居ていいんだよという感じが何か心で伝わってきましたよね。言葉の全てから。次も行きたくなるような機会をいただけるのも行く理由になりますし。例えばティーンズクリエイションで言えば、ちょっとだけ演劇やってみない？と誘われ、やってみようかなと。その練習が例えば夜の6時からだとしたら、そうですね、少し早めに3時から行っておしゃべりしようかなと思える。

やっぱりスタッフの方々の「愛」ですね。

「なんていうんですかね…
いい意味で『関係ない人』
なんです」

話せる関係性の秘密

一人となりは大きいですね。フレンズ☆SAKAEの環境や、生まれる人間関係というのは、何か例えられるものはありますか？例えば、居場所については「家族みたいな関係」、なんていう言葉を聞くことがありますが、家族ともまた少し違う部分があるのかなと感じています。

実は、僕は隣の区に住んでいたので、40分くらいかけて電車でいつも行っていたんです。だから学校の友達とは全然違って、フレンズはフレンズの友達、みたいな感覚でした。学校の友達でもなく、近所の友達でもなく、ちょっと嫌な言い方ですけどいい意味で「関係ない人」、と言うと伝わるでしょうか。

関係ない人って嫌な言い方になっちゃうんですけど、だからこそ学校や部活のような自分の生活の話を説明したくなりますし、他の人の話も聞きたくなる。スタッフの方々とは、ティーンズクリエイションの話もたくさんしましたね。

こう表現するのがいいのかちょっとわからないんですけど、やっぱり生活の話を聞いてくれる、保護者でも先生でもない第三者の大人がいることによって増えた選択肢があったと思うので、そういう存在だったかな、と今は思いますね。

スタッフとしての目線

一お話伺っていると、本当に今につながっているんだなと実感します。

坂本さんは「若者」ならではの立場で、プレーパークなんかでは頼られる存在にもなっていて、ある意味スタッフとしての関わり方も経験されているように思います。子どもたちに関わるときに、ここはがんばったとか、工夫したなどということはありませんか？

同じ目線に立つことは結構意識していたんじゃないかなと思います。例えば、僕が当時大学生だったとき、僕の2個下ぐらいの高校生の女の子がいましたけど、その年代にとっての2歳は普通は大きな差ですね。でも話していて楽しい話題を選べば、もう普通に友達として話すような感じになっていきます。

当時中学生の、ちょっと不登校気味の女の子には、その子の話をなるべく聞いてあげたいなという気持ちで接していました。共感することもあるし、しなくてもただたくさん話せばいいと思っていましたね。



坂本 祭（まつり）
さん

フレンズ☆SAKAEに集った経験を持つ20代。好きなお祭りはお神輿で賑わう、栄区小菅ヶ谷の春日神社の例大祭です！

「同じ目線に立つこと。 そのことは意識していました」

相手が小学生になると結構変わってきて、もう全力で遊ぼう、と。遊んでいると、その小学生たちが「まつりくん、まつりくん」って来てくれるようになって嬉しかったですし、そういう子が友達を連れてきてその子とも遊ぶようになって、その輪がどんどん広がっていった…みたいな感じになっていた気がしますね。

フレンズ☆SAKAEでは、小学生の子なんかは時々宿題をやっています。見てあげることもあります。それが小学6年生の問題って結構難しいので僕がわからないときもある。それで小学生から勉強を教えてもらうなんてこともありましたね。僕も本当に全然わからなかったの聞いていますけど、やっぱりそういうところが、小学生にとってはお兄ちゃんに教えてあげられたみたいな気持ちになっていたと思いますよね。

特別考えていたわけでもなく今振り返ってみるとですが、日常のところで、何か相手と同じ目線に立とうとはしていたんじゃないかなと思います。

「ちょっとだけ」、の持つ力

一もう一つ、企画について気になっています。まちにいろんな企画、いろんな機会があった方が、引っ掛かる子どもや若者が増えると思います。

どこかが全部やるとかではなく、いろんな団体さんがいろんなやり方でいろいろあるまちになったら素敵だなぁと思うんですが、その中で何かフレンズ☆SAKAEだからできた企画について、思い当たるものはありますか？

何だろう…居場所だからできること。でもやっぱり、僕にとっては演劇でしょうか。やりたくないではなくて、やったことがなかった。やったことがないからやろうと思う機会もなかった。改めて考えると、役者になるなんて自分自身でもちょっと驚いてしまいます。ただ居場所として来ていて、企画に誘われるということ、それ自体が体験ですね。

興味のなかった事柄、自分が今までやったことのなかった企画に、一步踏み出して、あれだけ取り組めたのは企画としてすごく熱かったなと思いますし、居場所の持つ力だったと思います。別に断る理由もなかったので参加したという始まりでしたけど、あの体験を通して仲良くなれた子がすごく多いです。今では一番大切にしている体験ですね。

一やったことがないからやらない、になりやすいところ、やる方に向かうのがフレンズ☆SAKAEの素敵ところです。

そうですね。「ちょっとだけやってみなよ」って岩堀さんよく言っていて。段々「3個だけやってみない?」、っていう風にならなくなっていきますけど(笑)。

でもやって楽しかったことがたくさんありましたし、ちょっとだけやってみた、を自分の中でちょっとずつやってきた結果が今につながっていると思います。「ちょっとだけ」、やってみるのもいいかもしれないですね。

(聞き手 専門部会委員 岩堀 まゆみ
事務局職員 長南 悠太)

クロストーク

スタッフ目線 × 若者目線

最初に来たときは、誰とでも仲良くしましう、したいですっていう雰囲気をあまり感じなかったの、こんなにフレンドリーに変わっていったのはちょっとわからなかったです。資質としてはきっと今のような部分があったんだと思うんですけどね。学校のように関係性が出てくると言えないことも、利害関係がないからこそ話せる、というようなパターンは、今いる子たちについても感じます。

ちょっとしたらもうどんどん変わっていった、と本人も話しているように、相手がいくつの子であろうが何でも同じところにいる、上からのものの見方をせずに非常にフラットな状態でいてくれる、そこにみんなが寄ってきていますよね。もう小学生全員から「まつりはいないのか〜！」みたいな感じの扱いなんですけど、だけど、どこかリスペクトしているところはあります。多分大人で、ちょっと年上なんだけどからかってもいいみたいな存在なんだけれども、でも間違いなく大好き、みたいな感じですよ。そんな子がどんどん増えていったのが印象的でした。

本人にも話したことがないことで、私たちがフレンズ☆SAKAEとして、坂本くんとのかかわりについて考えていたことがあります。福祉への関心がある、ゆくゆくはそういった職業に就くかもしれないという話を聞いたときに、障害であったり、



居場所は生活の場。利用者の制作物や読み継がれたマンガが日常を感じさせる

スタッフ代表

フレンズ☆SAKAE代表 岩堀 まゆみさん

いろんな課題であったり、あるいは家庭環境であったり、そういうことに対して向き合う方向を間違わないで、表面上のことで決めつけないで、その人を見てきちんと自分の中で整理できる人間になってほしいなっていうのがあったんです。

福祉を担うにあたって、フラットに人を見ることは大切です。薬を飲む人は大変だからどうこうしてあげよう、とかそういうことではなく、その人の本質的なところを見て、支援を行っていく大人になってほしいなという思いがあったので、面倒くさいなと思われるかもしれないこともあえて伝えるべきことは伝えることもありました。

それからそれだけ人望も厚かったの、居場所ボランティアという形で大学3年生のときからは交通費を支給する形で来てもらっていました。ゆくゆくは多分、こういった系統の仕事に就くんだろうなということで、その間にいろいろ伝えられることは伝えていった、という関わり方です。ご本人にも全く言っていないんですけどね。

本当にどこに行ってもちゃんとやっていけるまで成長して、羽ばたいてくれたのかなっていう気はしています。もう私の方からは、どこに行っても元気で健やかに過ごしてくれればそれでいいっていう、もうそれに尽きますね。

若者代表

フレンズ☆SAKAE 元利用者 坂本 祭さん

それこそ僕、あんまり人と話したくないタイプの人間だったので、フラットに見る、ということはフレンズに行ってからちゃんとわかるようになりました。

フレンズでのきっかけから友達ができたというのはすごくあったし、学校とは違う友達だからこそ、属性ではなくて相手自身の性格、人格を感じて仲良くなっていったのかなと思います。僕に対して、人をフラットに見られる視点を身につけてもらいたっていうお話でしたが、心ではしっかり感じていました。フレンズに来る他の子たちも、同じだと思います。

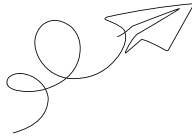
以前、岩堀さんは仕掛けづくりがすごい、という話をスタッフさんとしていて。中学校では不登校気味だった子が、メイクに興味があるということでメイク講座を開いたりして。その子はそのメイク技術を生かして、この前のティーンズクリエイションの舞台ではメイクさんとしても活躍しています。あともう1人、趣味とか特技とかあるのかなみたいな、あんまり表に出さないタイプの子がいたんです。フレンズでワークショップなんかに参加し始めてから、どうも演劇の才能がある、ということがわかり、もう毎年ティーンズクリエイションの演劇には出演しています。

こんな感じで、一人ひとりを見て、何か引っ掛からないかなっていうことを考えながらイベントを企画してくださっているというのは感じますよね。

僕は今、八王子に住んでいます。フレンズで感じた、地域ってすごい、地域活動ってすごく楽しいなっていう思いは引っ越してきてからも持ち続けていて、岩堀さんに倣って「仕掛けづくり」は大事にしようと思っています。なんか地域の人とつながらないかなと思って、掲示板をよく見るようになりましたよね。あと最近、河原を散歩していて、見知らぬおじいちゃんに挨拶したことがきっかけで、仲良くなって。そのおじいちゃんが蜚を守る会をやっている方で、活動に誘っていただきました。実は今日も、これから蜚を守りに行くんです。他にも、違う方に僕の名前の「祭」にちなんでお祭り参加しようよって誘われたこともあります。

地域でつながるためにはどうすればいいか、潜在的にというか、むしろ顕在的にすごく意識しながら行動ができていないんじゃないかなって最近よく思います。僕の中では仕掛けづくりとか、種まきとか、そういうものは岩堀さんから教えていただいた言葉です。すごく今、実になっているので、なんかさすがだなって思いますね。

エディタース ノート 参画の補助線



フレンズ☆SAKAEの事例でご登場いただいた、坂本祭さんが参加する春日神社の例大祭

闇バイトや悪質ホスト、パパ活・ママ活、宗教2世、いわゆるトー横キッズ…と、2020年代に社会問題化した現象は、孤独を抱える若者の「居場所」として機能する側面があったことを見逃すことはできません。以前から問題になっているネット依存等も含め、かつての青少年の健全育成の取組みとは次元の異なる対応が必要な問題として認識する必要があります。

私たちにとって、居場所とは文字通り「いる」ということのみを指すわけではありません。玉川大学教職大学院の笠原陽子教授は、望ましい環境として、

- ① 所属していると認識でき、それ以外との境界が明確であること
- ② 見守られ、心身ともに安心感を持てること
- ③ 所属集団外とも自由な交流ができること
- ④ 一定期間継続性が保持されること
- ⑤ 発達に合った「枠組み」が提供されること

があると言います。人は居場所だと感じる場所では、安心して「心を置く」ことができるのです。

闇バイトに加担し、やめたくても脅迫されてやめられない状態、悪質ホストから他者との自由な交流が絶たれた状態、など、冒頭の問題に関しては上記の何かが欠けています。これは悪意を持った主宰者が、利益のためにその場所に依存させようとするからです。彼らは不安を煽りつつ、闇バイトに加担し続ければ組織に守られ安心だ…というようなロジックを騙ることで、若者をコントロールしようとしています。

その結果、困難を抱える若者たちはより「マシ」な選択肢を自らを選んだように錯覚し、あるいは金銭／心理上の刹那的な報酬を得ることで、こういった場に一種の「居場所」を感じます。どの時代にも若者を操ろうとする悪意はありますが、現代社会におけるその狡猾さ、巧妙さには驚くべきものがあります。

こういった事件がなくなる背景に目を向ければ、家庭、学校、地域社会の変化、SNSの発達による情報の即時化、エコーチェンバー（タコ壺）現象等、多くの要因を語ることはできます。

しかし、分析や評価以上に重要なことは、私たちが若者の生活の中にあるべき居場所を作り維持すること、そういった様々な居場所について知識を持つことです。

一方で気をつけるべきことは、若者への押しつけにしないということです。社会経験を積んだ私たちは、つい若者に何かを授けたいと思ってしまいがちですが、若者はそれを望んでいるのでしょうか。フレンズ☆SAKAEの取材では、いい意味で関係がない」という言葉が印象的でした。別の現場では更生を支援する施設のスタッフから、「この現場では社会参画のフェーズ以前の問題だ」という声もありました。現代社会には、家庭や学校での厳しい日常を闘い、安息を得るために別の居場所を探している若者がたくさんいます。今何よりも求められているのは、フラットな視点を持ち、この場所にいていいのだという安心を作ることができる、必要に応じ別の場所につなげる知識を持つ支援者の存在なのではないでしょうか。

神奈川県は医療福祉の施策として、未病対策を推進しています。私たちの心身の状態は、健康と病気の間で連続的に変化する「未病（ME-BYO）」の状態だと捉え、日常生活の「未病改善」により、健康な状態に近づくことを目指すものです。

すばらしい活躍をみせる様々な社会参画の事例も、全ては施設や事業への、ある日の一歩から始まります。またそれは、社会問題化する「居場所」に向かわせない、羅針盤にもなり得ます。

社会参画の前に、ちょっとした参加の機会を。その参加の前に、ただいだけでいい、安心できる居場所を。若者の「未病改善」の処方箋は、みなさん「関係のない大人」こそが握っているのではないのでしょうか。

（事務局職員 長南 悠太）